

「鳩の翼」そのじゅうたんの下絵

中村, 英男

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

81

(開始ページ / Start Page)

121

(終了ページ / End Page)

137

(発行年 / Year)

1992-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004893>

『鳩の翼』そのじゅうたんの下絵

中村英男

Laurence B. Holland はその著 *The Expense of Vision* の中で「鳩の翼」には「相似的形式」なるものが見い出される、と述べている。少し長いが以下はその引用である。

... Instead of the central passion it gives the analogies or embodied likeness in which the mysterious passion itself is refracted. To do so becomes the burden of a passage near the novel's end, where, even when it is wrenched from context, one can imagine an unspoken statement of Milly to Densher, as she leaves him to face alone her doom:

"She had throughout never a word for what went on at home. She came out of that and she returned to it, but her nearest reference was the look with which, each time, she bade him good-bye...' It's what I have to see and to know——so don't touch it. That but wakes up the old evil, which I keep still, in my way, by sitting by it. I go now——leave me alone! ——to sit by it again. The way to pity me——if that's what you want——is to believe in me. If we could really do anything it would be another matter.'"

There is the form of Milly's passion, rendered by a passage which describes not Milly, but Kate, the look Kate gives Densher to say that she must leave him to sit alone by her penniless, sick, and ruined father. And her suffering, so similar to Milly's yet so different, is so precisely analogous to Milly's that the same

passage can give the form for both¹⁾.

病のもたらす苦痛や不安を己れだけのものとし、黙して語らず又人にも語らせぬようにし、自分自身以外の誰の目にも直接触れぬよう願っていた態度は、もともとミリーの彼女自身の不治の病に対するものであった。この批評家はそれと同様の身振りがケイトにも見られる、そしてそれは「中心の情熱」であるミリーの姿に反映したものだ、というのである。

彼がこのような事を言う必要がある、と感じたのは、ひとつには、貸貸された城館での最後の夜会で苦痛の源である病の影を完全に払拭しきった姿を見せた後、彼にとっては「主人公」であるはずの彼女の姿を直接見ることがほとんど不可能になってしまうためであろう、と推察される。ミリーが小説の後半の舞台から姿を消してしまう、という事についてのこの批評家なりの解答がこの「相似的形式」という事であったのだと思われる。この事自体、つまりミリーの姿が不可視になってゆくという小説の実際に対する理由付けは別の仕方、が可能だというのが我々の考えなのだが²⁾、ここではその点は追求せずに、何故ミリーの不在の解答として上に見たような形式の故の形式、とも見えるようなものの存在をこの批評家が想定したか、という点に視線を向けて見たい。

この疑問に対しての答えとして私が思い浮べているのは、「鳩」に付した「序文」において作家が至るところで、そのような純粹に形式に関わるようなものの存在を仄めかしているように見えたからではないか、という事である。以下はその「序文」からの引用である。

It isn't no doubt, however—to recover, after all, our critical balance—that the pattern didn't, for each compartment, get itself somehow wrought, and that we mightn't thus, piece by piece, opportunity offering, trace it over and study it. The thing has doubtless, as a whole, the advantage that each piece is true to its pattern, and while it pretends to make no simple statement it yet never lets go its scheme of clearness. Applications of this scheme are continuous and exemplary enough, though I scarce leave myself room to glance at them³⁾.

I recognize meanwhile, throughout the long earlier reach of the book, not only no deformities but, I think, a positively close and felicitous application of method, the preserved consistencies of which, often illusive, but never really lapsing, it would be of a certain diversion and might be of some profit, to follow⁴⁾.

At my game, with renewed zest, of driving portents home, I have by this time all the choice of those that are to brush that surface with a dark wing. They are used, to our profit, on an elastic but a definite system; by which I mean that having to sound here and there a littel deep, as a test, for my basis of method, I find it everywhere obstinately present. It draws the "occasion" into tune and keeps it so, to repeat my tiresome term;...⁵⁾

「単純にはわからないが、明確さ」を有し、「幻影のようでありながら、決して逸脱する事無く」、又どこにでも「強情なほどに存在している」形式、そういうものがある、と仄めかしておきながら、「ここではほとんどそれに触れる余地がない」と言われれば、ホーランドならずとも、それに対する答えを見たい、と欲さないではいられないであろう。もっとも、引用した文章からも明らかな通りジェイムズの「序文」の難解さ、というのは一筋縄ではいかない。それはひとつにはジェイムズが彼固有の比喩によって、あるいはもともと比喩であった言葉で（少なくとも知るかぎりでは具体的な説明を加えずに）語り続けるから、ということもあるが、結局の所は彼がここで問題としている事柄について本当には語りたくない、ただ仄めかして止めておきたい、という願いを持っているからであるように思われる。彼がわざわざこの「序文」において読み手に「精読」を要求しているのも、彼のいうシステムが元々「幻影のような」ものであってみれば、最終的には読み手が見いだすのでなければ存在したことにはならない類のもの、と彼が考えていたためではなかったろうか。

その意味で言えば引用した批評家の見いだした「形式」は「序文」での仄めかされた条件を充たしている、と言えるかもしれない。しかし、ミラーを相変

わらず中心とみなすという姿勢への疑問はここでは差し控えるとしても、単純な言い方をすれば単なる反映としか言えないようなものが、ジェイムズの言うシステムの実体と見るのは少し安易に過ぎるのではないか。例えば、次の事は彼の提示したシステムの妥当性への自然な疑問だろう。それは、後期のジェイムズに特徴的な対称に対する偏愛とも言えるような執着から考えれば、登場人物の一方の若い女性であるミリーに堪え難い苦痛と不安の源がある以上、他方の女性にもそれを与えるというのは、いわば当たり前のことであり、特別「幻影のような」システムとは見做しにくい、という事である。照応関係は確かに、後に見るように存在しており、その点を指摘したことは彼の洞察に負うところが大きい、その照応関係自体がそのままシステムであるというのは率直な言い方をすれば粗略、と感じられる。つまり、もし、ホーランドが見いだしたような、(ミリー・不治の病)という組と(ケイト・父親の過去の悪行)という組とが等号で結ばれえるような関係があるとしたら、それは特に小説の後半に単に反映としてあるのではなくって、小説の全体に「強情なまでに存在」している、と考えられるし、そのように考えたほうが自然であろう、という事なのである。

我々の見方では、ホーランドが見たのは、システムの一部、であり、システムの全体、そこにこめられた意味、を知るためには、まず彼の見いだした照応関係について調べ、その上でそこにある意義を抽出することが肝要であろう。つまり、もしミリーの不治の病、ケイトの父親(及び彼の過去の「悪行」)の間になんらかの一貫した照応関係があるという事が言えたなら、その照応関係と共通の意義を有する他の関係を探ってゆく事がシステムの全体を明らかにする方途と考える。もしホーランドの見いだした照応関係が他の照応関係と共通の規律によって支配されている事が確認されれば、それを「序文」において仄めかされていたシステムの全体、と認めて良いであろう。

ミリーの病とケイトの父親とが至る所で同様な圧力にさらされているのを観察するのは困難な事ではない。例えばケイトの父親が物語の後半で不可視の再登場を果たした際、デンチャーはつぎのようにその再登場を描写している。

The peace, within a day or two—since his seeing her last—had clearly been broken; differences, deep down, kept there, by a diplomacy on Kate's part as deep, had been shaken to the

surface by some exceptional jar;...⁹⁾

ミリーの「平和」が破られた際にヴェニスに荒れ狂った嵐の場面とは無論スケールの点で比較にならぬ程隔たっているが、それぞれのものに加えられていた力の性質に於いての違いはない。必死の努力によって不可視のものとしていたもの、それぞれの女性が人には見せまい触れさせまいとしていたものが、押さえつけてきた力をはねつけて遂に噴き出してきた、文体が「相似」の手法を通じて伝えようとするのはそのような印象である。

小説の冒頭の場面、ケイトが「破滅した」父親を訪ね、共に生きることを申し出、拒絶される場面は小説中の圧巻だが、ここにも又ミリーの場合との照応を見ることが出来る。ケイトの父親との会見は、ミリーが不治の病の可能性から逃避することをやめ、著名な外科医のルーク卿の診察を受ける場面とある共通の意義を以て互いを照らしあっている。マッチャムの園遊会で味わった「定められた幸福」の甘美さに抗してミリーが診察を受けるために医者を訪れたのが、彼女の幸福の約束を裏切るような、無視することの出来ぬ暴力を秘めた現実を見据えるためであったように、ケイトの父親との会見も、彼女が伯母から与えられた幸福の約束、醜い現実の圧伏された美しい物語の魅力に抗して行われた、自身の運命への直面であった。心地よいフィクションから目をそらし、自身の「ありのまま」を見据えようとする事、それが二人の女性の行動に共通する意義と言って良い。

伯母が与えた様々な贅沢品の魅力よりも、彼女を直接そのような行動に駆り立てたのは、伯母が彼女の後見をする条件として提示した要求、ケイトにとりライオネルという父親が「存在する事をやめてしまう」という美しすぎる物語、であった。あれほど憎みかつ恐れた父親と共に生きるつもりだ、という決意を表明するケイトにデンチャーが敬意を見せたとき、そのようにするのは「勇気」のせいではなく、「自身をすくう」ためであり、「逃避」する為なのだ自嘲する。このような意味付けを通して明瞭にされるのは、もし伯母の条件、伯母の物語を受け入れるならば、彼女自身の存在の証、落ちぶれ果てたクロイ家最後の者としての自分を失うことになる、というケイトの意識である。加えて、自分には「破滅し破滅をもたらすような」父親はいないのだ、という伯母によって囁かれた物語が彼女にとって如何に魅惑的で抗いがたい力を有しており、又如何にその物語の誘惑が危機と感じられたかという、彼女の置かれ

た状況も表現されていると言えるだろう。

ケイトはケイト自身の明確に動機づけられた歴史を有しており、彼女は彼女自身の否認できない現実、を生きている。彼女が彼女であろうとするとき「存在しないこと」にすることの出来ない彼女の現実の象徴として、父親と父親の「悪行」は存在しているが、それは丁度ミリーの否認し得ない、彼女が見据えねばならない現実が彼女の不治の病によって表されているように、である。

それらの意義を明らかにしようとする形式の力がここに働いている事が読み取られねばならない。若い恋する女性として、デンジャーを捨て「破滅した」父親と生きようというケイトの思いが不自然だと感ずる批評家の感覚は決して誤っていない。それは不自然であること、技巧的である事、誇張されることを通して本来おぼろげな意味を固定しようとする試みなのである。

又ミリーの病も、ケイトの父親の過去の「悪行」も読み手が直接手を触れることが不可能にされているのは偶然によるのではなく、形式の要求の結果なのだと考える。それぞれがたびたび強調され光を浴びせられながら、具体的にはどのようなものか決して知り得ないよう定められているのは、それぞれがそれぞれの女性にとり等価物であることを示そうとする技巧と見做しえる。

ここまで見てきた、(ケイト・父親)と(ミリー・不治の病)の間の照応関係に共通する力の動きを簡単に言い表わそうとすれば、見ている者にとり美しい表面を織りあげるためには、実際には存在している何か(それは見ている者にとり「現実」の欠くことのできない構成物なのだが)それがどのような手段を取るにせよ覆い隠されねばならない、という事になるだろうか。もしこの力の動きが他の部分にも見いだされるならば、それを「幻影のようではあるが決して逸脱しない」、「しなやかではあるが、明確な」この小説に秘められたシステムのありうべき可能態の一つとして提出できよう。

事実が隠蔽されることにより美しい絵柄が描かれてゆくという構図は、なによりも小説全体の原動力であるケイトのミリーに対する謀り事のものであった。ほとんど現実上は無意味と思われる区別立てを通してそれは構成されてゆく。単にデンジャーとケイトの本当の関係を彼女に対して隠す、ということによって成り立っている、あるいは成り立っているかのごとく、語られるのである。「私は公正に振る舞ったのです」とケイトが主張するように、確かに嘘は決して口に出してつかれてはいない。それは沈黙を通してつかれているだけなのである。

ケイトが死にゆく娘に見せようとした美しい表面の作成は丁度ミリーの内なる死の事実に対して行われる「意識的な愚者の楽園 conscious fool's paradise」の反復行為である。ミリーの不治の病という事実を皆が実際には知りぬきながら、少なくとも表面上は口にする事を控え、かえって病人に輝かしい未来が約束されているかのごとく語り続けたように、ケイトとゲンシャーの関係の真実についても又、主な登場人物が、それぞれ別々の思惑からではあるが、ミリーの不治の病に対してしたような「沈黙の申し合わせ」を取り決めたかのごとくに振る舞うのである。その「申し合わせ」がどのように互いに異なった動機に基づいていようとも、一様になされる貢献により、「事実」は抑圧され、ミリーにとって心地よいがしかし歪んだ世界の像を結ばせるのである。

ミリーは時に、丁度ブロンツォーノの肖像画の前で不意に彼女がそれまで圧伏しようと努めてきた死という事実が噴き出してくるのをみたように、そのような「申し合わせ」により織り成された、彼女に取り都合の良い滑らかな表面から「別のケイト」——すなわちゲンシャーの恋人としての彼女の姿——の姿をとって隠されていたものがその真実を主張するのを見る。「現実」の醜悪さに彼女が心乱されるのは、無論彼女が、恋をする女性としてそうでない場合、を思い描きたいという欲望に欺かれているからにほかならない。

Thus it was that, aloft there in the great gilded historic chamber and the presence of the pale personage on the wall, whose eyes all the while seemed engaged with her own, she found herself suddenly sunk in something quite intimate and humble and to which these grandeurs were strange enough witnesses. It had come up, in the form in which she had had to accept it, all suddenly and nothing about it, at the same time, was more marked than that she had in a manner plunged into it to escape from something else. Something else, from her first vision of her friend's appearance three minutes before, had been present to her even through the call made by the others on her attention: something that was perversely *there*, she was more and more uncomfortably finding, at least for the first moments and by some spring of its own, with every renewal of their

meeting. "Is it the way she looks to *him*?" she asked herself—the perversity being how she kept in remembrance that Kate was known to him⁷.

ミリー自身がしかし、その「沈黙の申し合わせ」に加担しなかったら、つまり現実に目の前に現われる真実の姿を抑圧し、都合の良い物語に酔おうとしなければ、ケイトの謀り事は第五部での大英美術館におけるジェイムズお得意の偶然の出会いの場面において破綻していたはずである。ところがこれ以上はあり得ないほどのあからさまな証拠であるべき二人の逢引きを目撃したその後にも、ミリーは自身の美しい物語の延命を試み、そのフィクションに縋り続けようとするのである。

Little by little indeed, under the vividness of Kate's behavior, the probabilities fell back into their order. Merton Densher was in love and Kate couldn't help it—could only be sorry and kind: wouldn't that, without wild flurries, cover everything? Milly at all events tried it as a cover, tried it hard, for the time; pulled it over her, in the front, the larger room, drew it up to her chin with energy⁸.

自身の内なる「事実」は勇気を以て直視し得たミリーが外の世界のそれをついに注視しえない。或いは一方で希望を捨て「ものごとありのまま」に見たが故にこそ、残された最後の希望に縋らないではいられなかったのかもしれない。いずれにせよ、ミリーは己れの見ようとするものの甘美さに屈してしまう。何もかも彼女の見ようとしていた物語の下に覆いかくされてしまうのである。

ここまでケイトの謀り事の成立が「事実」の隠蔽によって成り立っている様をたどってきたが、その謀り事は又それ自体が我々の見てきた力の作用を受けて存在している。つまりケイトの陰謀はシステムの二重に力がかかる場なのである。彼女が恋人であり、彼女の計画に従えばミリーの夫となるはずのデッシャーに何も打ち明けず、あいまいな仄めかしだけで事を進行させるやり方もまた、計画を醜悪なものに見做し意識や関係の表面にそれが直接映ぜぬよう

加えられた圧力，という形でシステムを忠実になぞっている。

その事が明らかになるのは，加えられた圧力に抗して，押しこめられていたものが噴き出してくる場面においてである。ミリーの最後の夜会で前景に身をおいた二人の恋人がミリーの美しい姿がいかにして成り立っているか（それはケイトが正しく推測したように不治の病という事実の完璧な押し込めによってなりたっているのである）について推測しあう場面は，同時にそれまで一切確かめられることのなかった，彼らのそれまでの行動の意味と目的が明確にされる場面でもある。死にゆく娘の親友として友人として彼らが見せてきた寛容な態度や優しい言葉という美しい表面の下で蠢き続けてきたものが，いまその醜い姿を現してくるのである。注意を払うべきは，親密な関係をとり結んでいた二人の間で，今まさに語られようとする事が，主にケイトの方針に従ってはあがるが，一個のタブーとして扱われ続けてきた，という点である。少なくともデンチャーにとっては，それは言い当てられぬ言葉，としてあった。

She did at last make him think, and it was fairly as if light broke, though not quite all at once. "You must let me say I *do* see. Time for something in particular that I understand you regard as possible. Time too that, I further understand, is time for you as well."

"Time indeed for me as well" And encouraged visibly by his glow of concentration, she looked at him through the air she had painfully made clear. Yet she was still on her guard. "Don't think, however, I'll do *all* the work for you. If you want things named you must name them."

He had quite, within the minute, been turning names over; and there was only one, which at last stared at him there dreadful, that properly fitted. "Since she's to die I'm to marry her?"

It struck him even at the moment as fine in her that she met it with no wincing nor mincing. She might for the grace of silence, for favour to their conditions, have only answered him with her eyes. But her lips bravely moved. "To marry her."

"So that when her death has taken place I shall in the natural course have money?"

It was before him enough now, and that he had nothing more to ask; he had only to turn, on the spot, considerably cold with the thought that all along—to his stupidity, his timidity—it had been, it had been only, what she meant. Now that he was in possession moreover she couldn't forbear, strangely enough, to pronounce the words she hadn't pronounced: they broke through her controlled and colourless voice as if she should be ashamed, to the very end, to have flinched. "You'll in the natural course have money. We shall in the natural course be free."⁹¹

それまで決して口にされる事のなかった暗い欲望が、ミリーの姿が目にはいる場所で、言葉となってその姿を明確に現す。ケイトがたじろぐことなく、全てを口に出しているのは一つにはそうすることによって謀り事が彼女一人のものから、彼ら二人のものへと変容し得る、と見做したためでもあるが、同時に又彼女が計画を一方では醜悪なものを取り扱いながら、同時にそれ固有の論理を美しいものと見做そうと望んでいるからである。少し前にケイトの謀り事は二重の圧力にさらされていると述べたが、正確に言えば、謀り事を「美」と見做そうというケイトの論理の力を勘定に入れば三重の、ということになるかもしれない。

ただしここにある複雑さは一筋縄のものではない。自身の謀り事について「私が見ているものの美しさを壊さないでください」と男に向かって言い放ったこの女性の論理の複雑微妙さは解説を必要とする。この事はデンジャーの人生というものについての彼自身が認める洞察力の欠如、その一種の不能と関わっている。小説に打ち込まれた説明は曖昧ながら充分にこの点について語っている。彼が小説の冒頭米国に赴く事を話し合ううち、ケイトが彼に対して出す手紙を彼らの結婚に反対する伯母の目にみつかるようにテーブルの上に置いたりせず、自分で手づから出しますとケイトが言ったのを受けて、この男がそれでは手紙を隠すことになってしまい「公正」な振る舞いとは言えない、と咎めた事に対し、女は男の愚かさについて次のように注釈する。

"Men are too stupid—even you. You didnt understand just now why, if I post my letters myself, it won't be for anything

so vulgar as to hide them.”

“Oh you named it for the pleasure.”

“Yes; but you didn’t, you don’t, understand what the pleasure may be. There are refinements——!” she more patiently dropped. “I mean of consciousness, of sensation, of appreciation,” she went on. “No,” she sadly insisted——“men don’t know. They know in such matters almost nothing but what women show them¹⁰.”

たしかにデンジャーは何も見事の出来ぬ男である。自分の恋人が自分の目の前でずっと何をやり続けてきたのか、ミリーの最後の夜会での確認を得るまで気づくことが出来なかった。大英美術館での偶然の出会いの後の場面でミリーにははっきりと見て取れたケイトの無言の芝居の意味も結局その場では知ることが出来なかった。彼は若いストレザー、内部に至る洞察力を欠いたものとしてこの小説の内にいる。しかし彼自身は上記の引用の場面で口にしはしないが、もし、ケイトが伯母に見つからぬように自分で手紙を出すならば、いかにそこに「洗練さ（微妙さ）」の快樂があるかと結局は手紙を隠して投函するという彼女のいう「下品」な行為を構成してしまうことになるのではないだろうか。ケイトをいらだたせたのは、本当は男の微妙さへの無能力というよりも、むしろその無能の故にあまりに露骨に真実を言い放った男の単純さなのではなかったか。

ケイトがミリーへの謀り事の進展が「理想的」だ、という時、自然男はその言葉に拘泥する。しかしケイトに固有の論理においては彼女の謀り事はミリーに最後に唯一可能な成就した恋愛という幸福を与えるという誰も否認し得ない大義を有しているのである。彼女の見ようとし、又実現させようと試みた物語はミリーに束の間とはいえ、愛する男との結婚をかなえさせる、というものであった。ケイトの信じようとする物語においては、ミリーは彼女が得させようとした幸福をつかんだものとして描かれる。

“The great thing,” Kate then resumed, “is that she’s satisfied. Which,” she continued, looking across at him, “is what I’ve worked for.”

“Satisfied to die in the flower of her youth?”

“Well, at peace with you.”

“Oh ‘peace’ !” he murmured with his eyes on the fire.

“The peace of having loved.”

He raised his eyes to her. “Is that peace?”

“Of haveing been loved,” she went on. “That is. Of having,” she wound up, “realised her passion. She wanted nothing more, She had *all* she wanted.”

Lucid and always grave, she gave this out with a beautiful authority that he could for the time meet with no words¹¹⁾.

このケイトの説明は無論デンジャーも読み手も納得させはしない。ミリーが真実を知り、苦痛を得たという事実を無視し、何故ケイトがこのような綺麗事をいまさら自身に満ちた態度で口に来るのか、デンジャーは一種の邪悪さをすらここに感じるのであるが、我々は既に得たシステムへの知識から、ケイトの主張の内に、醜い現実に自分にとっての美しいヴェールをかぶせようとする女の必死の手つきを見て取れるだろう。彼女にしても心の奥底から己れの口の喋る事を信じているわけではなく、謀り事を実行に移していく際に彼女が継り続けていた論理——死にゆく娘に与え得る最後の幸福は愛し愛されたという感覚であり、たとい通常の倫理からは外れているにしても自分の計画はその意味で正当なものなのだという——にここでも継っているに過ぎないのである。

縫らざるを得ないという事は、しかし、逆に言えばそうしなければ美しい表面が保たれ得ないという危機の感覚があるからに他ならない。如何に意識すまいとしても、自分の恋人を「貸し付け」ようとしたのは、ミリーの「為」、などでなく金を必要としていた自分の為であったのだという事など、もとより彼女は百も承知なのだ。しかし美しい説明に継る事をやめてしまえば、彼女は金の為は無垢の友を裏切った女、という堪え難く汚れた自身の姿を事実として引き受けねばならなくなる。ケイトがデンジャーに向かって自分はミリーに対し「公正に」振る舞ったのだ、と必死に主張するのも美しい自分の姿を守ろうとする仕草であり、言葉によって現実の意味を変容させようとする錬金術師の如き試みである。噴き出してこようとするものが如何に醜いか知り尽くしていればこそ、彼女は「美しい権威」で以てそれを圧伏するよう努めねばならないのである。ミリーが「真実」を知り苦しみ、そして死んだという突きつけられる

現実に目をふさぐこと、否認しつづける事、彼女の生き延びてゆく道はそこにしかない。

しかしケイトの見ていたミリーの姿が余りに生き残った彼女に都合の良い姿だったとしたら、デンシャーの信じ込んでいるミリーの姿も又彼自身の、そのように現実を見たい、という欲望に根ざしたものではなかったか。彼がケイトの提出するミリーの姿——彼に最後までだまされ続けることを願っていたという——にひるまざるをえないのは、彼自身が提出するミリーの神格化された姿がケイトの主張する人並みの女性でしかなかったミリーの等身大の姿を押し隠して成り立っていたからではなかったか。ミリーとの最後の会見についてケイトの伯母に語るデンシャーの口調には、気は進まないながらもとは言えはっきりとミリーの最後の夜会で取り交わされた契約によって決定的となったはずの彼自身のケイトの謀り事への関与という今となっては醜悪としか感じられない現実を覆いかくさねばならないという無意識の欲望が見え隠れする。

And it was the front so presented that had been, in Milly, heroic; presented with the highest heroism, Aunt Maud by this time knew, on the occasion of his taking leave of her. He had let her know, absolutely for the girl's glory, how he had been received on that occasion: with a positive effect——since she was indeed so perfectly the princess that Mrs. Stringham always called her——of princely state.

Before the fire in the great room that was all arabesques and cherubs, all gaiety and gilt, and that was warm at that hour too with a wealth of autumn sun, the state in question had been maintained and the situation——well, Densher said for the convenience of exquisite London gossip, sublime. The gossip, for it came to as much at Lancaster Gate——wasn't the less exquisite for his use of the silver veil, nor on the other hand was the veil, so touched, too much drawn aside¹²).

銀のヴェールが覆いかくし、ミリーの「英雄的」な態度が覆いかくしたのは、デンシャーがそのように語る事によって忘れたいと願いケイトに知らず知

らずおわせようとしている否認しがたい悪意と罪の醜悪な形である。ケイトのいうミリーの姿が有する半分の真理が彼の見ようとする「すべてを許してくれた」女神の如きミリーの姿、彼女を主人公とする美しい物語を汚そうとする。彼がケイトを受け入れられないのはケイトの見方が彼には余りに安易な罪の感覚の回避としか映らないからである。彼は自分の行動がただケイトとは違う方法で同一の効果を求めているだけであることに気づき得ない。デンジャーが造り上げようとした彼にとっての美しい表面である崇高なミリーの姿をケイトが受け入れようとしなかったように、デンジャーも又ケイトの造り上げようとするこういった美しいフィクションを拒否せざるを得ない。互いが互いの偏愛する偶像を破壊し合う、それが小説の冒頭であれほど愛しあい強く結ばれていたはずの恋人達が第十部において行なっていることである。それは結局一個の現実であるミリーという女性をめぐるの相容れることのない認識、相容れることのない解釈の闘いであった。

小説の終わりは彼らが「決して昔の我々には戻れない」ことを確認しておわるが、彼らをその位置においやったものは、何であったのか、彼らの結論はミリーの「翼が彼らをおおった」のだという言葉に示されている。ここで注目したいのは「おおう cover」という単語である。というのは、あの大英美術館での遭遇の場面の後ミリーがケイトの態度から二人の恋人の関係を自分の都合の良いように解釈して、その解釈で全てを「おおう cover」事を試みるからである。ミリーが直接最後に「覆った」ものは何だったか、それはマーク卿の密告によって明かされたデンジャーとケイトとの関係の事実、である。それまで彼女自身の努力と周りのものの黙秘によって織り成されてきた美しい表面（彼は或る時点から明らかに死にゆく娘を慕う男の役を果たし、その後もケイトの伯母の前でその役を演じ続けている）が汚され破られて、そこから隠されている事によってますます醜さを増した事実が姿を現したとき、ミリーは真実を見る。優しい言葉や美しい表情や立派な行動の下に蠢き続けてきたものが噴出したのを彼女ははっきりと目撃するのである。その事を示すのが、ミリーがその瞬間「壁に顔を向けた」というストリンガム夫人によって報告された幾分芝居のかかった仕草、である。彼女は醜さを直視することに絶え得なかった。それ故目をそらしたのである。これは彼女がすべてを正しく認識したことを示すジェイムズの付した記号であろうと思われる。すべてを知ったその上で彼女は、ケイトとデンジャーを守るために元々の美しい物語をマーク卿に信じ込ま

せることに成功する。デンチャーの愛しているのはケイトでなく自分だと。噴き出そうとしてきた醜さを彼女は押し込めるのである。

一方でその醜さが押しこめられた美しい表面の物語を生きながら（つまり恋人に死に別れた男を演じながら）、デンチャーは与えられて彼の立場を良くしたそのフィクションに耐えきれず、ケイトに対し彼らの押し込められた本当の関係を明かす事、即ち押しこめられた醜さを白日に曝すことを提案する。彼は二人してミリーからの遺産の受けとりを断り、罪を犯さなかった美しい二人として、或いは罪を許された二人として生きてゆくことを、ケイトに迫るのだが、彼女は、自分の物語をうけいれぬ恋人を「ミリーの思い出」に恋をする男として拒絶することになる。ケイトによって与えられたミリーの見ようとした物語が、与えたケイトの現実を打ちひしぐのである。

ここまで幾分拙速気分ではあるが、見てきたシステムに従うならば、この小説における美はすべてが何らかの醜を抑圧する事によって存在している。醜は無論隠されること、抑圧されることを通してそれらを否認し押し込めたものとの比較において醜さを獲得してゆくのに過ぎず、またそれらが真理と化するのも、単なる事実でしかなかったものを押し込めようとする物語がそれらを暴かれるべき対象、としての真理となすにすぎない。我々の見てきたシステムがジェイムズが「序文」に仄めかしたものと本当に合致しているとするならば、我々は小説内のすべての美、すべての真理に疑いの視線をなげかけるべき、であろう。

美しいものがあるとしたら、それはただ平板なもの単純なものとしては決して存在してはいない。かならず何らかの醜さを抑えこもうという緊張の上のみ存在しており、その意味で常に複相のものとして奥行を備えているのである。真理も又同様テキストの表面に素朴平板に存しているものは、自分が真理であると主張する事を通し何事かを否認する事を通して、その背後に真理を生み出しているフィクションであり、真理を奥深く押し込め不可視のものとしようとする封印であるに過ぎない。

注

- 1) Laurence B.Holland, *The Expense of Vision* (Baltimore, 1982). pp. 314-315f.
- 2) 別の論文において既に指摘したことだが、この小説の本来の主題は、ジェイムズ自身の証言によれば「ケイトのデンチャーとの歴史、及びデンチャーの彼女との歴

史」であって、「ミリーの歴史」は「単にそれに含まれ巻き込まれるもの」としてあるに過ぎない（1902年9月9日付けの手紙）。では何故「序文」のジェイムズはあたかもミリーが小説の主題であるかのごとく語るのか、その答えは恐らく「鳩」の「序文」においてジェイムズが指摘したこの小説の在り方、と関わっているであろう。ミリー自身の物語とミリーに魅了されるものの物語は一枚のメダルの表裏であり、そのどちらも見るものが自由に選択できるよう「メダルは確かに妨げられることなく吊されている！ The medal *did* hang free!」と作家が言う真意は結局、表と見えるものが裏であり裏と見えるものが表であった、という小説の複雑なつくりではなかったろうか。

しかし何故彼はそのような、いわば二重の物語を提出したのか、どこかでそれは「ロマンスをものにしようという卑しい望みの結果」なのだ、と自嘲気味に言わせたのは何であったのか。それに対する答えも「鳩」に付された「序文」に記されているように思われる。

Those addressed to "conditions of publication" have in a degree their interesting, or least their provoking side; but their charm is qualified by the fact that the prescriptions here spring from a soil often wholly alien to the ground of the work itself. They are almost always the fruit of another air altogether and conceived in a light liable to represent *within* the circle of the work itself little else than darkness. still, when not too blighting, they often operate as a tax on ingenuity—that ingenuity of the expert craftsman which likess to be taxed very much to the same tune to which a well-bred horse likes to be saddled. The best and finest ingenuities, however, nevertheless, with all respect to that truth, are apt to be, not one's compromises, but one's fullest conformities,

それは「売れる」小説を求め続ける出版社の要求に応じようという職業作家としての意向の結果、であった。無論の事まったくそのような市場の要望に応えるだけ、の駄作を書くつもりは毛頭なく、ただ与えられた条件に「黙従」すること、表面上従って見せながらその実己れの芸術的意図を追求すること、その結果が、「鳩」という小説となったのである。

小説の後半、ミリーの最後に開いた夜会は全体が明らかにヴェロネーゼの *The Feast in the House of Levi* を喚起させるような仕方ですべて書かれており、実際その名が挙げられているが、ジェイムズがわざわざ絵を限定できるようにしたのは彼のこの小説における態度——「妥協、ではなく精一杯の黙従」という——を暗示するためではなかったろうか。

というのは、ヴェロネーゼのこの絵はもともとは「最後の晩餐」という題であったのだが、異端審問所より横槍が入り、絵の内容の変更を求められた画家が、結局その絵の題を変更する事で自身の芸術的意図を通した、といういわくつきのものだからである。作家は、出版社という異端審問所に「黙従」を以て応えようとする自身の姿を重ね見ていたのではないだろうか。

- 3) Henry James, *The Wings of the Dove* (New York, A Norton Critical Edition) p.11
- 4) *ibid.* p. 13.
- 5) *ibid.* p. 15.
- 6) *ibid.* p. 378.
- 7) *ibid.* p. 140.
- 8) *ibid.* p. 180.
- 9) *ibid.* p. 308.
- 10) *ibid.* p. 75.
- 11) *ibid.* p. 364.
- 12) *ibid.* p. 369.

付 記

この論考は1988年11月の都立大学秋季英文学会において発表した内容をもとにして書かれた。